

○チョウセンナニワズについて (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On *Daphne koreana* Nakai

チョウセンナニワズは朝鮮と本州中部にのみ分布するとされているが、四国にもあることが分かった。1986年の6月に阿部近一氏等徳島県の植物研究者の案内で剣山に登った際、1800 m 付近の行場と呼ばれる場所の石灰岩上にそれがあるのを見付けた。若い実の時期であったので、花の色は分からなかったけれど、葉の様子からチョウセンナニワズであると現地で認めることが出来た。標本を調べてみると、すでに二階重楼氏が明治37年(1904)に剣山で採集しているし、1968年には剣山の胎内めぐりでも採集され、愛媛県大野原の標本もみつかった。大野原も石灰岩台地である。これらはオニシバリと同定されているが、葉が大きくて薄く、標本にすると脈が目立つので、チョウセンナニワズと考えられる。

チョウセンナニワズはかなり前から赤石山脈で採集はしていたが、葉が薄いことからナニワズと考えていた。ただ松田弘明氏が赤石山脈の各所で採集してこられたものに花が紅紫色のものと黄色のものとがあるので気にしていた。これがナニワズやオニシバリでないことに気がついたのは、1955年の5月に武甲山に登った時である。頂上近くの石灰岩の上に濃紅紫色の花を付けたものを見付けた。葉も伸びたばかりであり、ナニワズやオニシバリと異なるので調べた所、朝鮮から中井猛之進氏が報告されたチョウセンナニワズと同じものであることがわかった。シンチョウゲ科を専門に研究された東京大学農学部の浜谷稔夫氏は1959年に、チョウセンナニワズについて本州中部の多数の採集地を挙げ、オニシバリの変種として発表された。オニシバリの変種とするのが適当かどうか検討する必要があると思っていたが、専門に研究している訳でもないのでそのままにしていた。四国での発見を機会に私の見解を述べておきたい。

オニシバリ *Daphne pseudo-mezereum* A. Gray, ナニワズ *D. kamtschatica* Maxim. var. *jezoensis* (Maxim.) Ohwi, チョウセンナニワズ *D. koreana* Nakai は近縁のもので、ヨーロッパから西シベリアに分布する *D. mezereum* L. に対応するアジアの種類であると考えられる。*D. mezereum* の花がアントシアニン系の紅紫色の色素しかもたないのに対し、アジアの種類は総てフラボン系の黄色の色素を持つ点は異なる。

オニシバリは東北地方南部、関東・中部地方の太平洋側から近畿以西、四国、九州に分布し、林縁に生える。花は黄緑色でやや赤褐色を帯びる。葉は柔らかいがやや厚く、脈はあまり目立たない。秋に葉が伸長して冬を越し、3月に上部の葉の腋ごとに数個の花を付ける。葉は4～5月によく茂り、7～8月には落葉する。したがってナツボウズの名もある。

ナニワズは北海道、東北地方、北陸地方に分布し、低木林内に生える。花は黄色でやや緑がかかる。葉は薄く葉脈は目立つ。秋に葉が伸長して、冬は雪の下で過ごし、3月末から4月に葉の腋に数個の花を付ける。新潟地方では春にまだ雪が消えない頃、マルバマ

ンサクやタムシバと共に開花し、新葉に混じった黄色い花の姿が美しい。葉は5～6月によく茂り、8月頃には落葉するが、オニシバリほど顕著でなく、9月に新葉が伸びる時にも残るものもある。

ナニワズの側脈は湾曲しながらあまり分岐せずに葉身内を走る。最下からひとつ上の側脈は葉身のなかばに達する。オニシバリの側脈はよく分岐し、ややジグザグしながら葉身内を走る。最下からひとつ上の側脈は葉身の1/3ほどで終る。この違いは花が無い時の区別に有効で、浜谷氏が図示して解説している（本誌 30: 35, 1955）。

チョウセンナニワズは満州南部、朝鮮、四国、本州中部地方に分布し、ウスリー地方にも分布するらしい。花は濃紅紫色であるが黄色が混じるのでくすんだ色である。春に新枝が伸びると同時にその下部に花が開く。葉は6～8月によく茂り、秋に落葉する。葉は薄くてナニワズに似るが、側脈の様子はオニシバリと同じである。

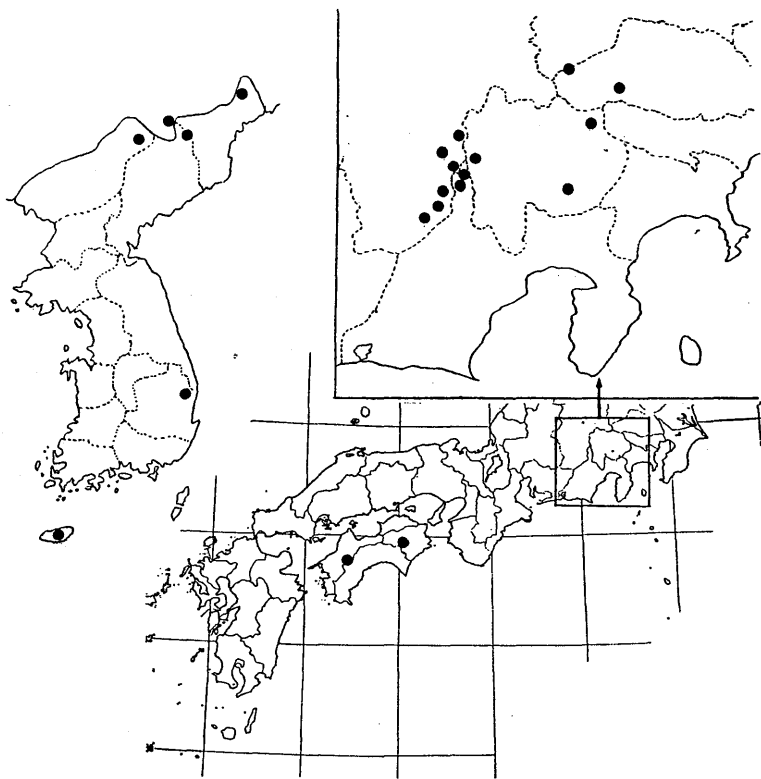


図1. チョウセンナニワズ *Daphne koreana* Nakai の分布図。

オニシバリ、ナニワズは春に葉が茂る春型の生活をする種類である。それに対してチャウセンナニワズは夏に葉が茂る夏型の生活をしている。前者は他の植物の葉が茂らない時期に葉を茂らせるのに対し、後者は岩上にあるため、他の植物の隠蔽を考慮する必要がない為であろう。こうした生活の仕方の違いは歴史的な背景のもとに作られたものと思う。

ジンチャウゲ属の種類は区別点として取り上げられる特徴が少なく分類の難しい群である。ジンチャウゲ *D. odora* Thunb. とコショウノキ *D. kiusiana* Miq. とは生品で見れば間違えることのない別種であるが、標本ではよく似ている。中国中部・南部に分布する毛端香 *D. odora* var. *atrocaulis* Rehd. は、普通はジンチャウゲの野生変種とされている（中国高等植物図鑑 2: 951, t. 3632, 1972）。しかし花が白色で、萼筒の外面に短軟毛がある点でコショウノキの変種 *D. kiusimana* var. *atrocaulis* (Rehd.) F. Maekawa (Journ. Jap. Bot. 21: 45, 1945) とすべきものと考えられる。このように明らかな別種でも十分に認識されていない。オニシバリ、ナニワズ、チャウセンナニワズは微妙でもはっきりした特徴があるので、それぞれ別種として扱うのが妥当でないかと思う。

チャウセンナニワズの花は濃紅紫色であるが、オニシバリも赤色の色素があって赤褐色を帯びる。個体によってはこの色が強く、ムラサキオニシバリ f. *atropurpurea* Hiyama (本誌 32: 114, 1957) とされるものもあるので、花色だけで特徴づけることはできないが、多くは濃紅紫色である。しかし時に黄色のものが見られる。これはアントシアニン系の色素ができず、普通の植物なら白花となるところであるが、フラボン系の黄色の色素は無くならないので、黄色になるものと思われる。チャウセンナニワズは日本では多くは石灰岩に生える。北岳付近や三ツ峠ではそうでないらしいが、他の採集場所はすべて石灰岩である。浜谷氏は富士山の石灰岩でない場所から本種を報告しているが、そのもととなった標本は葉がやや厚く、側脈は不明瞭で、オニシバリでないかと思う。花は紅紫色と書かれているが、秋遅くに採集された若いつぼみであって、霜の害も受けているであろう、正常な花の色ではない。

チャウセンナニワズはまだあまり認識されていないので、学名の整理と採集地を記しておく。

*Daphne koreana* Nakai in Journ. Jap. Bot. 13: 880 (1937); Kitagawa, Neolineam. Fl. Mansh.: 462 (1979).

*Daphne kamtschatica* auct. non Maxim.: Komarov, Fl. Mansh. 3: 79 (1907), p. p.; Nakai, Fl. Sylv. Koreana 17: 45, f. 13 (1928); Lee Tchang-bok, Ill. Fl. Korea: 559, f. 2236 (1979).

*Daphne pseudo-mezereum* auct. non A. Gray: Hamaya in Journ. Jap. Bot. 30: 37 (1955), p. p.

*Daphne pseudo-mezereum* A. Gray var. *koreana* (Nakai) Hamaya in Bull. Tokyo Univ. Forests 55: 72, map. 6 (1959); Kitamura et Murata, Col. Ill. Woody Pl. Jap. 1: 221 (1971); Hayata in Satake et al., Wild Fl. Jap. Woody Pl. 2: 77 (1989).

Distr. Korea, Shikoku and C. Honshu.

This plant generally grows on calcareous rocks in Japan.

Hab. Manchuria: Distr. Tunghua, Changpaishan 長白山, in subalpine conifer forests (M. Takahashi, Aug. 8, 1939, TNS).

Korea: Pref. Hamkyong-pukdo; Fluvium Tumingan, Distr. Musang, circa Ozan-pen 茂山郡, 倉坪 (V. Komarov, Jul. 9, 1897, TI) Pref. Hamkyong-namdo; Potaesan—Höchangryong 胞胎山—虛頂嶺 (T. Nakai, Aug. 6, 1914, TI). Pref. Pyongan-pukdo; Huchang-gun, Namsa 厚昌郡, 南社 (M. Furumi, Aug. 22, 1917, TI). Kyongang-pukdo; Yonyang-gun, Ilwolsan 日月山 (Chen Suk-kyu, Jul. 27, 1937, Type TI). Is. Chejudo, Hallaisan 1400 m (Taquet, Aug. 4, 1910, no. 4091, TI).

Shikoku: Pref. Tokushima; Tsurugisan (Z. Nikai, Aug. 13, 1904, TNS; Jul. 19, 1911, TNS), ibid. Tainaimeguri (S. Takahuzi, Jul. 19, 1968, TNS), ibid. Gyōba 1800 m (T. Yamazaki, Jun. 6, 1984). Pref. Ehime; Ohnogahara (O. Tokui, Oct. 18, 1958, TNS).

Honshu: Pref. Shinano; Kami-inagun, Senzyōdake (F. Kimura, Jul. 24, 1955, TI), Miwamura, Shiraiwa 1500 m (M. Mizushima, Aug. 4, 1958, TNS), Inasatomura, Mibugawa, Ohyokogawa 1350 m (H. Matsuda, May 2, 1954, TI), ibid. 1800 m (H. Matsuda, Jul. 18, 1954, TI), Shimoinagun, Toyoguchiyama (S. Kurata, Sept. 13, 1955, TOFO), Ohshikamura, Koshibugawa (Furusawa et Kuraishi, Jul. 27, 1953, TI), Ohshikamura, Aokigawa, Tsubakuroiwa 1400 m (T. Yamazaki, Aug. 21, 1965, TI), Kizawamura, Tōyama-gawa, Shingasawa 1200 m (Yamazaki et al., Aug. 1, 1954, TI). Pref. Yamanashi; Kitadake, Hirokawara 1500 m (T. Yamazaki, Aug. 7, 1949, TI), Kitadake, Ryōmata (H. Uematsu, Aug. 1, 1949, TI), Mitsutōge (H. Kanai, Jul. 21, 1957, TI; S. Okuyama, Sept. 5, 1962, TNS), Tsurugun, Tabayamamura, Aoiwashōnyūdō (S. Kurata, Aug. 4, 1957, TOFO). Pref. Shizuoka; Igawamura, Ohigawa, Nishimata 1500 m (H. Matsuda, May 2, 1954, TI), ibid. Higashimata 2000 m (H. Matsuda, Jul. 18, 1954, TI). Pref. Saitama; Oganochō, Hutagoyama 1000 m (T. Yamazaki, Jul. 27, 1973, TI), Bukōzan 1200 m (T. Yamazaki, May 2, 1955, TI)

(東京大学 理学部附属植物園)